Nara Women's University

No.07

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2010-06-21 キーワード (Ja): 生涯学習 キーワード (En): 作成者: 弦巻, 克二, 小田切, 毅一, 遊佐, 陽一, 吉原, 千賀, 杉峰, 英憲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1577

奈良女子大学 生涯学習教育研究センター NEWS

生涯学習公開講演会風景（講師：中西進京都市立芸術大学長・奈良県立万葉文化館長）

Contents 目次

●生涯学習教育研究センターの歩み（センター長挨拶） …… P1
●身体や運動の教養に目覚めることこそは、生涯学習の究極の課題だ …… P2
●生涯学習支援における大学の役割と大学における生涯学習支援の役割 … P3
●高齢者と学生との関わりから生まれる生涯学習 …… P4
●センター主催公開講座報告 …… P5−6
●シンポジウム報告「女性教員のライフスタイルPart Ⅱ」 …… P7−8
●放送大学奈良学習センターとの共催による生涯学習公開講演会 …… P9
●奈良県社会教育センターとの共催事業「奈良県生涯学習カレッジ」 …… P10
●平成17年度公開講座開設予定一覧 …… P11

2005/3/31 No.7

生涯学習教育研究センターの歩み

生涯学習教育研究センター長　弦巻 克二（文学部 言語文化科 日本アジア言語文化学講座 教授）

独立行政法人化を前に、昨年、本学の「生涯学習教育研究センター」のありかたを他のセンター構想と絡めて、「アジア・ジェンダー文化学研究センター」との合同による「男女共同参画社会をリードする人材の育成」強化、或いは「教育システム研究開発センター」との連携による「学校教育」の総合的研究の取り組みなどとともに、専任者の配置の必要性などを述べた記憶があるが、平成16年度の活動を振り返ってみれば、結局、「中期計画」に盛り込まれた「地域の国公私立大学等との連携強化」による「公開講座」の充実が柱となった。

従来の路線に沿って開催された「女性のエンパワメントに関するシンポジウム」――「女性教員のライフスタイル　Part Ⅱ」（平成16年11月9日）は、佐保会や教育学の諸先生の協力を得て、記念館が満席であった。教職経験をもつ本学卒業生の体験を通して、教育の現場に立とうとする教員志望者のキャリア形成に資するとともに、女性教員の抱えている問題点が浮き彫りになっていれば幸甚である。女高師以来の伝統を引き継ぎ「男女共同参画社会をリードする人材の育成」に広く寄与するようなシンポジウムを、キャリア教育や佐保会との連携によって強化する必要性を痛感した。

平成16年度の活動として特筆すべきは、放送大学奈良学習センターとの共催による二度の「公開講座」が、放送大学側との協力によって実施されたことであった。平成16年8月7日開催の「イラク情勢を考える」は、テレビでも馴染みの放送大学・高橋和夫助教授の講演が時宜を得ていたし、平成17年2月19日に開催された文化功労者・中西進先生の「詩の永遠――「万葉集」について」は、本学が日本の古代文化形成の研究拠点としてＣＯＥに採択された記念事業の感もあって、申し込みを途中で打ち切らねばならぬほど多くの方々が足を運んでくれた。さらに「活字文化推進会議」との共催による平成16年6月12日開催の「21世紀活字文化公開講座」が、作家・林真理子氏の講演と本学の鈴木広光助教授の講演で、日本各地から多くの聴衆を得たことであった。いずれも著名な方々による公開講座が好評だったわけだが、「生涯学習教育研究センター」がその窓口であった。

一方、3年前に始まった学部横断的な、当センター主催の「公開講座」――「青少年問題を考える」（平成16年7月30日開催）と「奈良女子大学の歴史」（同・9月25日開催）は、広報活動や時期設定、聴講者の絞り込みがうまくゆかず、講演者に申し訳ない仕儀となった。「青少年問題を考える」の総題のもと、高橋裕子先生の「未成年喫煙をめぐる諸問題」も、浜田寿美男先生の「学校と子ども――いま子どもたちの生きるかたち――」も、時宜を得たテーマであると自負し、学校関係者の関心をそそるものとして奈良県立教育研究所の要請にも応えたものであったが、参加者は少なかった。広報活動の遅れ、時期設定の見通しの甘さ等が露呈した。「奈良女子大学の歴史」に関しては、本学創立百年を目前に、しかも独立行政法人化の第一年目として、同窓生や学生達に是非本学の歴史を顧みてもらい、新たな一歩をと期待をこめた企画であったが、9月25日という、夏期休暇中の開催という時期設定の誤りが致命的であった。「草創期女子高等教育の成立と展開」という演題で話された杉峰英憲先生と「初期女高師・校長と教官の服装について」話された岩崎雅美先生にお詫びしたい。

当センターでは、今後生涯学習のニーズのリサーチを徹底して行うとともに、継続的に開講するテーマや、場合によっては聴講者を特定した講座等も検討していきたいと思っている。各部局でも、根本的に、今、公開講座として何が必要か、地域貢献として何が可能かを、長期的展望のもとに真剣に検討していただきたいと思っている。

身体や運動の教養に目覚めることこそは、生涯学習の究極の課題だ

小田切　毅一（文学部 人間行動科学科 スポーツ科学講座 教授）

国立大学法人化に伴い開始された地域貢献事業。スポーツ科学講座でもこの２年間、奈良県や奈良市と提携しながら、「健康なら21Stepアップ事業」を展開している。いつまでも元気歩行を継続するための健康啓発だが、ボランティア指導者の「サロン」を開設したところ、これに参集したメンバーは平成17年１月現在で50～60代を中心とする125名になった。50代のメンバーは専ら女性が中心で、60代になって男性メンバーが登場するのは、彼らが定年後に初めてこの種の活動に参加可能になるためだ。

健康のありがた味は、むしろ疾病とか身体的機能の低下や傷害などを契機にして自覚し、体感するものかも知れない。運動をしたら肩こりや腰痛が治ったとか、食欲が増したといった体験や体感が引き金になって、健康に向けての運動習慣も生活に機能するようになるものだ。

奈良県と奈良市の調査（平成12年）をみると、たとえば「運動することが生活習慣病予防に効果があることを知っている」人は、40～50代の奈良市民の場合で、90.5％にも達している。またそれ以前に、同年代の奈良県民の男性81.4％、女性85.8％が、「運動不足だと感じている」ようだ。だがその一方では、週２回の１日30分以上の運動を実施している人、すなわち運動習慣を有すると規定される人の割合は少なく、各年代を平均すると男性が14.7％で女性が13.8％に過ぎない。もとより若い世代では一段と低率で、この平均値は明らかに60歳代の高まりに救われている。

こうした調査結果は、身体や運動にかかわる教養への目覚めが50～60歳代に至って初めて実を結ぶ、といったことを示唆するものかもしれない。セカンドライフへの転換期は、だから身体や運動の生きた教養に目覚める絶好期でもある。「サロン」に集まってきたボランティア指導者達は、この時期に身体的に自立し、運動を習慣化できた教養人と言えるかもしれない。仕事から解放された余暇生活を意味あるものにしたい。休養型より積極・追究型を、必要ならばその経験にお金をかけることも厭わないし、時には地域社会に向けたボランティア活動にも参加できるようにしたい..等々。セカンドライフを充実して過ごすためには、まず身体や運動の教養に目覚めることが前提なのだ。少なくとも普通の平凡な人間にとっては、自らの身体に耳を傾け、運動し行動する体感を楽しめるような、そんな生きる力がそのための前提になる。

考えようによっては、知的な認識の対象となる教養と身体や運動を通じて体得される教養には、一種の「ズレ」や「不一致」が存在するのかも知れない。前者を優先させてきた近代人のホモ・サピエンスへの自負には、養老孟司氏が指摘するような、身体や運動の教養を殆ど無視してきたことに通じる「バカの壁」も顕在だ。身体に耳を傾け運動し、行動することで得られる体感には、もしかするとこの「バカの壁」を低くさせるような、新たな教養への手がかりが包含されているかもしれない。

奈良県や奈良市と提携しながら、「健康なら21Stepアップ事業」を展開してきたこの2年間に、元気なボランティア指導者の行動力に圧倒されながら、こんな事を考えた。身体や運動の教養に目覚める事こそは、究極的な生涯学習の課題に他ならないのだと気づかされることとなった。

生涯学習支援における大学の役割と大学における生涯学習支援の役割

遊佐 陽一（理学部 生物科学科 個体・集団生物学講座 助教授）

世はカルチャーセンターが大はやりである。英会話、俳句教室、フラワーアレンジメントなど数限りなくある。なぜカルチャーセンターがはやるのか。これを参考に、大学の生涯学習支援活動には、どのようにすれば客が来るのかを考えるのが本稿の第一の目的である。第二の目的は、限られた時間のなかで、われわれにどのような生涯学習の支援ができるのかを考えることである。

実際にカルチャーセンターに通う人々にその目的を聞くと、友人を作る、趣味を持つ、技術や資格の取得などを挙げる人が多いであろう。このうち友人は人が集まれば勝手にできるのでさておき、趣味として、あるいは技術や資格として、大学が何を提供できるのかを考えてみたい。例えば古典の読解、英会話、パソコンなど、カルチャースクールで行われている多くのことは、実は大学でも開講できる。また、腐っても権威があるので、大学が何か証明書を発行して資格認定すれば、それはそれで意味があろう。修士号、博士号を授与できればさらに箔が付く。つまり、カルチャーセンター以上のことをわれわれは提供できるのである。なあんだ。

とすると、なぜ大学における生涯学習支援活動は盛んにならないのか。これはむしろわれわれの側に原因がある。本来の仕事である大学や大学院における教育や研究活動以外に、各種の学校への出前授業、産学官連携への取り組みなど、法人化してからわれわれの業務は大幅に増えた。その程度はすでに本来の活動に支障をきたすほどになっていると個人的には思うが、それはともかく、限られた時間の中で、いかにうまく生涯学習支援を盛り込むかという感覚も必要になってくる。大きな大学であれば専任教員をつけ、生涯学習支援に専念させることも可能であろうが、うちのような小さな大学では非常に難しい。

そこで、生涯学習支援などの社会的活動と、本来の業務である大学・大学院の教育や研究とを密接に結びつけることが必要になる。公開講座等で学問の面白さを広く知ってもらい、ゆくゆくは聴講生や大学院生として入ってもらえるような筋道を作る。もちろん入学を義務付けるべきではないが、いわば体験入学として公開講座を活用する。あるいは生き物の調査を通して自然に親しんでもらい、ついでに研究にも親しんでもらって、知らず識らずのうちに研究活動に引きずり込んでしまう。つまり研究活動を通したギブアンドテイクを目指す。こういうメリットも積極的に考えつつ、大学における生涯学習支援を考える必要があるのではないか。

わたしの専門分野でいうと、ダーウィンや南方熊楠をはじめ、多くの偉大なナチュラリストが良い意味での素人であった。職業人としての生物学者にはない自由な発想が、彼らの研究を独創的なものにしているということは、よく言われる。生物の種数は数限りなくあり、またそこらに普通にいる生き物の生態もほとんど分かっていない（誰かミミズの交尾をよく見たことがありますか？）。

したがって、生涯学習のプログラムを終えた受講生ができること、なすべきことは多い。巷のカルチャースクールで得たものとは違い、科学論文は、どんな出来のものでも100年単位で残るのだ。このメリットを売り物にし、受講生を募ることは可能ではないか。ただし、本学は女子大である。受講生の性別は問わないが、その後どんなに大学院に入って勉強したくとも、男性は本学に入学できない。そういう方は、大変お気の毒ですが、京大か阪大の大学院にでも進学してください。

高齢者と学生との関わりから生まれる生涯学習

吉原　千賀（生活環境学部　人間環境学科　生活文化学講座　助手）

ある週末、公共図書館に出かけた。休日ということもあり、多くの人々が入り口で開館を待っていた。そこには子ども連れの若夫婦、友達同士で来た中高生、テスト前らしき大学生、休日にもかかわらず背広を着たビジネスマン、そして杖をついて待つ高齢者・・・。何と幅広い年齢層の人々が一堂に会しているんだろう。開館を待ちながらしばしその様子を眺めていた。

生涯学習とは、幼児期の学習・教育にはじまり、学校での学習・教育、社会人（老後も含めて）としての学習・教育と、生涯にわたる学習・教育を総括した言葉だと言う。その意味で、先の光景はまさに「生涯学習」の道すじを体現しているとも言えよう。とりわけ長寿高齢化の現代では、高齢社会対策として「社会参加活動の促進」とならんで「生涯学習社会の形成」が挙げられるなど、生涯学習はしばしば長期化した「第二の人生」をいかに生きるのかといった高齢者の生きがいと関連づけて議論される。

数年前、ある老人会へアンケート調査に出かけた時のことである。調査に協力いただいた後、当時大学院生だった私に対し、「せっかくのこの機会に大学でどのようなことが研究されているのか何でもいいのでぜひお話してください」とか、「われわれ年寄りのことを若い学生さんたちはどう考えているのか、どう見てるんやろうか」といった声が聞かれた。また別の老人会では、「小学校で楽器を演奏させてもろうて、子どもたちも楽しそうにしてくれてて。でも、あなたぐらいの学生さんと接することって最近あったかしら」と。昨年秋の本学での公開講座においても、ちょっとした間の時間にお手伝いの学生たちに対してとうとうと話し始める方がおられたり、「最近の学生さんはこんな密度の濃い講義、どんな風に勉強しているのかしらね。きっと有難味がわかってないわね」との厳しい言葉を投げかけられる方もおられた。

高齢者たちは、大学でなされている研究や講義について大きな関心を寄せているのはもちろんのこと、もう一方では大学生・大学院生といった若い学生たちとの関わりにも興味・関心があるのではないだろうか。平成１６年版の『高齢社会白書』によれば、地域の様々な社会教育活動では、「高齢者の生きがいを高めるとともに、各世代が高齢者との交流や高齢化問題についての学習を通して、高齢社会についての理解を深める役割を果たしている」という。しかし、ここでいう「各世代」の中でも高齢者（もっと言えば地域社会）との関わりが薄い世代の一つが大学生・大学院生であろう。高齢者との関わりを通じての高齢社会への理解がしにくい世代ともいえる。核家族化による祖父母世代との同居率の低下を挙げるまでもなく、高齢者と学生世代が日常的に関わる機会が少なくなっている。

大学では、生涯学習の場として社会人の受け入れが進んでいるが、最近では特に高齢者を対象にした「シニア枠」を設ける大学も出てきているようである。高齢者たちは日常どんなことを話題にし、考え、生活しているのか。逆に学生たちはどうなのか。「生きがい」、「高齢化問題についての学習」といった大それた形でなくとも、高齢者も学生も日常的な相互の関わりを通して、「どう老いるのか」という誰もが避けては通れない問いを現実味を持ったものと捉え、取り組んでいくことが可能になるのではなかろうか。このような場を提供するのも、大学ならではの生涯学習教育のあり方かもしれない。

生涯学習教育研究センター主催公開講座

「青少年問題を考える」「奈良女子大学の歴史」

生涯学習教育研究センター長　弦巻 克二（文学部 言語文化科 日本アジア言語文化学講座 教授）

一昨年度から、各部局で行う専門的公開講座に加えて、より大局的、学部横断的見地や社会・地域のニーズを加味した公開講座を当センター主催で実施してきた。

今年度は、健康増進法の施行や青少年犯罪の低年齢化にもともなう諸問題について、喫煙や青少年の抱える課題を中心に、7月30日（金）に「青少年問題を考える」として開講。また、奈良女子大学創立百周年を目前に控えて、法人化された本学の歴史を再考すべく、9月25日（土）には「奈良女子大学の歴史」を女子教育や服飾史の観点から講演いただいた。

7月30日（金）　13時05分～14時35分

『青少年問題を考える』

奈良女子大学保健管理センター 所長　髙橋 裕子

子どもがタバコをやめられないのは、おとなと同様にニコチン依存に陥っているためであり、治療対象とすべき疾患である。小学校から高校、専門学校までの19,329名を対象とした2003年の兵庫県淡路医師会の調査によると、初めての喫煙経験に関して小学校1年以前と答えたものが39.3%（66／168）となっている。2000年度未成年者の喫煙行動に関する全国調査（厚生科学研究）では高校3年生で毎日喫煙する者は男子生徒25.9%、女子生徒8.2%と平成8年に実施された同様の調査と比較して増加し、特に女子生徒の喫煙は約2倍に増加していた。1996年から未成年の喫煙に対して禁煙治療を提供してきた。1999年の日本国内でのニコチンパッチ使用認可、さらに2003年からの未成年専用の携帯メールによる無料禁煙サポート（禁煙ジュニアマラソン）の提供開始等により未成年の禁煙治療は以前よりたやすくなったとはいえ、本人周囲ともに努力のいる作業である。何より大切なことは吸い始めないことであり、喫煙防止教育と喫煙しにくい環境の整備が重要である。奈良女子大学の地域貢献特別支援事業を基盤に、奈良県においては2003年から絵本教材「グッバイモクモク王さま」を用いた小学校1年生への喫煙防止教育が、さらに2004年からは「学校を軸とした禁煙化プロジェクト」（タバコゼロプロジェクト）が発足し学校構成員、保護者への禁煙治療の提供も含めた学校ぐるみの禁煙サポートが提供されているが、学校敷地内禁煙化の推進が待たれるところである。

7月30日（金）　15時00分～16時30分

『青少年問題を考える』

文学部 教授　浜田 寿美男

いま、子どもたちをめぐって様々な問題がマスコミを賑わせている。不登校やいじめ、校内暴力や学級崩壊、はては学校内で子ども同士の殺人さえ起こる。そうしたなか「子どもは変わった」と

いう言説がさかんに流れる。しかし生き物というレベルで見たとき、人間が、あるいは子どもが変わるのは、数千年、数万年の単位のこと。数十年で変わることはありえない。とすれば変わったのは子どもそのものではなく、むしろ子どもを囲む状況の側である。たとえば子どもたちはいま、小・中・高・大という学校制度の梯子をより高く、より効率的に上ることを求められ、それによって将来を保証されるかのように思わされている。結果として学びの意味はその制度の内に閉じられ、子どもたちは学びが開く実質的な意味の世界を見失い、学びそのものから逃走をはじめている。子どもたちの生活世界が混乱しはじめているのは、こうした背景のなかでのことである。この現実を見きわめる「子ども学」の樹立がいま緊急に求められている。

9月25日（土） 13時05分～14時35分

『奈良女子高等師範学校と奈良女子大学』

文学部 教授　杉峰 英憲

今日、全国の国立大学には、各大学の学問的特質や地域的特性を基盤にした教育・研究の質的充実や個性化が強く求められている。本講演の趣旨は、本学の前身である奈良女子高等師範学校の特色ある伝統をふまえ、今後、奈良女子大学はどうあるべきかについて、女高師の卒業生と女子大学の卒業生との比較調査研究を基に、積極的な女子大学改革構想の方向性を探るところにあった。

調査結果からは、女高師の卒業生たちも女子大学の卒業生たちも、奈良女子大学に、教育・研究面の国際化、並びに男女共同参画社会をリードする人材育成を期待していることが分かっている。

こうした期待は、通り一遍のように響くのではあるが、講演では、データの共分散構造分析結果を紹介し、卒業生たちのこの意向性は、戦前、戦中、戦後を通じて揺れ動く女子高等教育の理念の実質的・実際的・社会的な側面から紡ぎ出された歴史的意向性であり、女性の現実的生活に根ざす重みを持つものと考えられることを指摘した。

9月25日（土） 15時00分～16時30分

『初期女高師校長と教官の服装について』

生活環境学部教授　岩崎 雅美

記念館の二階には初代と二代目の校長の乾漆像が置かれているが、両者とも大礼服の服装である。大礼服は三代の校長まで着用された。その上衣は立襟付きの燕尾服形、下衣は襟無しの短いチョッキ、袴は側章付きのズボンで、材質は全て黒羅紗である。他に剣帯付きの剣と駝鳥の羽で縁取られた帽子が加わる。刺繍は全て金のモール糸で、五七の桐紋を取り入れた唐草文様、ブレード（縁飾り）は電文（雷文）である。初代校長の喉下には勲三等瑞宝章（中綬）が吊り下げられ、二・三代目の校長の右胸下には少し大きな勲二等瑞宝章の勲章がつけられている。「文武高等官官等表」によると、文部省直轄諸学校の校長は五等から二等の範囲にあり、二等は勅任官である。文部省直轄諸学校（明治26年8月勅令第86号）は39校あり、奈良女高師も含まれている。ゆえに女高師の校長は高等官二等の勅任官として大礼服の着用が許されたのである。このように女高師の権威は校長の服装にも表現されていたのである。

女性のエンパワメントに関するシンポジウム報告

「女性教員のライフスタイル」Part Ⅱ

杉峰 英憲（文学部 人間行動科学科 教育文化情報学講座 教授）

本年度のシンポジウムは、昨年度のテーマを引き継ぎ、その「Part Ⅱ」と題して、平成16年11月9日、本学記念館の講堂で行なわれた。昨年度とほぼ同様に、教職の経験を持つ本学の卒業生にパネリストをお願いしたが、本年度は、現職教員に加うるに、退職された教員で、現在大学で研究生活を送っておられる方々をお招きした。それは、本年度の課題が、ライフスタイルの背景にある潜在的な女性観、ジェンダー問題へのスタンス、などに光を当て、そこから本学の女子大学としての存在を問い直す試みにあったからである。

パネリストは、岩崎紀美子（元三重県・大阪府立高等学校教諭、現本学博士後期課程研究生）、永曽義子（奈良女子大学附属中等教育学校教諭）、橋本陽江（兵庫県立姫路ろう学校教頭）、松井玲子（元枚方市立小学校教諭、本学・京都外国語大学・種智院大学非常勤講師）、和田貴代（大阪府松原市立第三中学校教諭）の各先生方であった。

人間らしく生きることへ向かって、「世間一般のしきたりへの挑戦」として自分のライフスタイルをお話になった岩崎先生、女性が仕事を持つことの意味を「楽しく生きる」という観点からお話になった永曽先生、女性教師の「生き甲斐」を逆説的な表現で語っておられた橋本先生、文化的行動様式を担い「素直に生きる」ことの中にある出会いを体験的・感動的にお話になった松井先生、熱中して生きるという生き方の中に、人からのエネルギーを受けとめ、女性教師としての自分を発見していくプロセスをお話になった和田先生、諸先生方のこうした様々な切り口からの迫力あるお話は大変示唆深いものであった。

また、参加した150名を超す学生の方からの質問も多く出され、パネリストの先生方の生き方の中にある本質的な「よろこび」とは何であるのか、あるいは、これまでの生活の中で「一番大切にしてきたもの」は何であったのか等の考えさせられる問いが出された。

今回のシンポジウムの成果は、教員養成における開放性の原則の基、教職の世界に広く諸学問の成果を導き入れるという総合大学としての本学の課題の認識が深まったこと、並びに、この課題の実現は、本学が女性をエンパワメントしていくということに供応しているという実感とともにあるということの確認であった。

人間文化研究科人間環境学専攻1回生　河鳥 麻尾

今回のこのシンポジウムで強く感じたことは、女性のたくましさである。教師を経験なさっている女性だけがそうだ、というわけではないのだろうが、5名の先生方は皆、たくましく生きていらっしゃた。現在の厳しい就職活動の様子を間近で見て「女なんだから…」と少し逃げ腰になっていた私は、話を聞いて、頭がグラグラした。―自分は今後どのように生きていくべきなのだろう。

結婚・出産後も、みなさん仕事を続けていらっしゃる。私の母も教員で、5名の先生方と同様、結婚・出産を経験し、今も現役で国語の教師として働いている。また、知人に、教員を退職した現在もいきいきと趣味に興じていらっしゃる女性が大勢いる。やはり、一生涯仕事を続けたいと思っている女性には、教師という仕事が適職なのだろう。

女性の社会進出に否定的なジェンダー観が強い時代を生きてきた女性の一人である岩崎先生は、強い信念を持ち、それを生涯にわたって貫き通す強さを持っていらっしゃった。「生きたい様に生きる。」岩崎先生のこの言葉が、私の心に重く響いた。偶然私も先生と同じモットーを抱いているのだが、先生のバイタリティーにあふれる行動力には圧倒されるばっかりで、同じモットーであってもその言葉の重みは比較にならない。結婚・出産、夫の転勤などで生活パターンの変更に迫られたとき、「女だから…」と考えるのではなく、世間の風潮に縛られずに自分の気持ちに素直に従って行動なさってきた先生方の生き方は、人間として尊敬するところが多い。

“幸せ”のあり方は人によって異なる。必ずしも、社会の先頭に立ってバリバリ働き、仕事も子育ても両立していくことだけが女性の幸せではないだろう。今回、5人の先生方のお話を聞いたことは、自分の人生・生き方を再度じっくりと考えてみる良い契機となった。そういう意味でこのシンポジウムは、とても有意義であったと思う。

理学部生物学科1回生　渡邊 陽子

シンポジウムに参加し、思ったことがある。「女性と教職」について書こうとしているわけだが、それは人によって、様々であるということだ。パネリストのある方は、「若い人を教育することは、素晴らしいことだと思って教師になった。」そしてもう一人の方はこうだった。「教師に胡散臭さを感じていたが、敢えて、自分に挑戦するような形で、教師という職業を選んだ。」お二人の教師になった理由は全く違っている。しかし、「教師」という同じ職業についている。

私は、教師という仕事を、他にいろいろある仕事よりも身近に感じている。それは、私の母も昔教師をしていて、その時の話をいろいろ聞かせてもらっているからだ。

しかし母は、小学校から中学校に変わり、数年後に教師の仕事をやめている。それはやはり、仕事と家庭が両立できないと感じたからだそうだ。今日のシンポジウムの中で、女性だから、といる理由で辛いこともあったという話があったが、それでもまだ、他の職場よりは男性と女性は同等だという。しかし同じだからこそ、大変なことも出てくるそうだ。例えば、同じ学年の先生達の中でも、若い独身の男の先生や、子供がいる女の先生など様々だ。様々であるけれど、生徒であった私たちの目から見れば、独身でも家庭を持っていても、先生は同じ、先生なのだ。私が中学生だったときの担任の先生は、担任を持つのは初めて、という独身の若い先生だったけれど、その熱意のある姿は生徒である私たちにもはっきりと伝わってきた。家庭や、子供を持っている先生は、もちろん、家に帰ったら家事や子供の世話などをしなければいけない。そうやって、やることはいろいろあるのだけれど、前に挙げたような先生とも同じ学年としてやっていかなければならない。

しかし母は、教師を辞めた後も、家庭教師など、なにかしら「教える」という仕事に関わってきている。人と接するという点で、思い通りにならないこともたくさんあるが、それでも、「分かった」と言ってくれたときの嬉しさは格別だという。子供の成長に関わっていくということは、こわいこと（責任がある）でもあり、嬉しいことでもある。

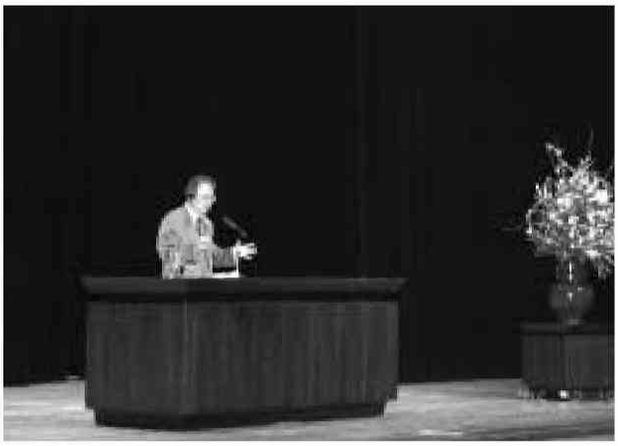
私は今のところ、教師になりたいとか、はっきりと思っているわけではない。むしろ、自分は何かを教えるということには向いていないのではないかと思う。しかしパネリストの方の「自分を変えるために教師になった」という言葉が心に残っている。向いていないと思って最初から諦めるのではなく、いろいろこれから考えていきたいと思う。

放送大学奈良学習センターとの共催による

生涯学習公開講演会

昨年度、新たに地域の国公私立大学等との連携強化の一環として、放送大学奈良学習センターと奈良女子大学が共催し、年二回の「生涯学習公開講演会」や「シンポジウム」を実施することが石川實放送大学奈良学習センター長と当センター長との間で合意されました。両者が協力しての講演会やシンポジウムが、地域の人々の生涯学習に対する興味・関心を啓発し、生涯学習意欲の充実に寄与することになれば幸いであると思います。

記念すべき第一回「生涯学習公開講演会」は、石川實放送大学奈良学習センター長の尽力により、平成16年8月7日（土）本学記念館において、放送大学助教授・高橋和夫氏の「イラク情勢を考える」をテーマに約160名の参加者を得て開催いたしました。



第二回「生涯学習公開講演会」は文化功労者・中西進氏（京都市立芸術大学長、奈良県立万葉文化館長）を迎えて、平成17年2月19日（土）本学講堂において、「詩の永遠――「万葉集」について」をテーマに約350名の参加者を得て開催いたしました。

奈良県社会教育センターとの共催事業

奈良県生涯学習カレッジ

奈良女子大学生涯学習教育研究センターでは、平成11年度より、奈良県社会教育センターの主催のもと、県内国公私立大学との共催により、「奈良県生涯学習カレッジ（平成15年度の「生涯学習大学特別講座」を改称）」を実施しています。これは、世の中の急速な変化に伴い、県民の生涯学習に対するニーズも多様化・高度化の傾向が著しくなったことを受け、これらのニーズに応えるべく高等教育機関の所有する「専門性」と奈良県社会教育センターの持つ生涯学習推進のための諸事業との融合を図り、県民により質の高い生涯学習研修機会を提供するためのものです。

奈良女子大学生涯学習教育研究センターでは、毎年度下記のとおり講演を担当しており、平成17年度以降も協力を続け、地域との連携による生涯学習教育研究体制のネットワーク化を推進していきたいと思います。

参加対象：県内在住・在勤者

募集人数：100名

久保博子 生活環境学部助教授 講演風景

■本学担当講義テーマ・講師

平成11年度

「歴史の中に探る生涯学習と総合学習」

山田　昇　名誉教授（奈良女子大学生涯学習教育研究センター長〈当時〉）

平成12年度

「島々のくらしから学ぶ教育力」

長嶋　俊介　生活環境学部教授（奈良女子大学生涯学習教育研究センター長〈当時〉）

平成13年度

「生涯学習の思想」

伊藤　一也　文学部助教授

平成14年度

「衣生活の創造－ピーシングとキルティング－」

岩崎　雅美　生活環境学部教授（奈良女子大学生涯学習教育研究センター員〈当時〉）

平成15年度

『複雑系』－偶然と必然をめぐって－」

角田　秀一郎　理学部教授（奈良女子大学生涯学習教育研究センター長〈当時〉）

平成16年度

「健康ライフのための睡眠環境」

久保　博子　生活環境学部助教授（奈良女子大学生涯学習教育研究センター員〈当時〉）

平成17年度公開講座開設予定一覧

講　座　名	開　催　日　時	受講対象	募集人員	担当部局	備　考
生涯学習と大学	平成17年 6月25日(土) 14時～15時30分	一　般	200人	生涯学習教育研究センター TEL0742-20-3067	放送大学奈良学習センターとの共催
初心者のための情報セキュリティ講習会	平成17年 7月16日(土) 9時～15時	一　般	50人	理 学 部 TEL0742-20-3428	部局開講
教職員のための夏の公開講座	平成17年 8月1日(月) 13時～16時30分	教　員	40人	附属中等教育学校 TEL0742-26-2571	奈良県立教育研究所
数学へようこそ	平成17年 8月18日(木)・19日(金) 10時～16時	一　般 教　員	100人	理 学 部 TEL0742-20-3428	奈良県立教育研究所
パソコン活用講座 ～プレゼンテーション～	平成17年 8月21日(日) 10時～16時	一　般 教　員	50人	総合情報処理センター TEL0742-20-3251	奈良県立教育研究所
パソコン活用講座 ～文書・表計算～	平成17年 8月27日(土)・28日(日) 10時～16時	一　般	20人	総合情報処理センター TEL0742-20-3251	部局開講
共生と寄生 ～生物同士の様々な関係～	平成17年 8月27日(土) 10時～17時	一　般	40人	人間文化研究科 TEL0742-20-3208	部局開講
遊ぶこころ・遊べるからだ ～新しい健康スポーツを求めて～	平成17年 8月27日(土)・9月3日(土) 10時～16時30分	一　般 教　員	50人	文 学 部 TEL0742-20-3328	部局開講
生活と健康	平成17年 9月24日(土)・10月1日(土) 10時～15時	一　般	50人	生活環境学部 TEL0742-20-3498	部局開講
はじめての画像編集	平成17年 10月2日(日) 10時～16時	一　般	20人	総合情報処理センター TEL0742-20-3251	部局開講
宇宙の中のミクロの世界	平成17年 10月2日(日) 13時～16時15分	一　般 教　員 高校生	50人	理 学 部 TEL0742-20-3428	部局開講

★上記公開講座の受講を希望される方は、各担当部局までお問い合わせください。

奈良女子大学生涯学習教育研究センターニュース No.7

発行日　平成17年3月31日

編　集　奈良女子大学生涯学習教育研究センター　〒630-8506 奈良市北魚屋西町

ホームページアドレス http://www.nara-wu.ac.jp/lle　メールアドレス gakumuka@jimu.nara-wu.ac.jp

（事務室）奈良女子大学学務課　〒630-8506 奈良市北魚屋西町　TEL.0742-20-3067　FAX.0742-20-3234